

小笠原諸礼大全

卷之下



○礼家定法婚礼之式高家大家の例より平人上中下之差別あり
 下へ略義等本式之定例不制法○座席小謡百三十一番祝言佳祝宴
 追福席まゝ之撰用○茶の會○生花例○香道○右二件諸流對口訣

小笠原諸礼大全

下上巻目

小笠原諸礼大全下之巻目録

- 兄合乃國 日祝 二 仲人公坊の事 夫婦の祝 三
- 本式結納之事 日かざりつ 三 奥清左衛門の事 結上福の國 六
- 庭續松糸お合れ餅乃事 日六 紙燭と 日國 六
- まへ持系物の事 日七種古来の様子 本式食膳 嫁出まゝ 七
- 嫁出立道具かざり乃事 八 三盃膳部等の事 日國 八
- 祝子居物の國 祝子居 基 八 色紙一の事 日國 十一
- 引渡七三三八三十二系又組合 平人祝初め 其後の式式十二 嫁男へ兄系乃事 十二

俗説さうきのり 八百八十りら幸	十二	むこ入る事	十三
婿礼床簀并なるもの	日圓 日を一秋のり	日圓 日を一秋のり	十四
婿礼祝儀状	十六	日返り	十六
月女乃文	十六	結納日縁之中 日縁は日縁	十六
嫁入る具日縁換 日縁	十六	小笠原初秋書	十六
若常 産室の圖	十七	さあし乃	十八
喰紗の幸	十八	日圓	十八
發 日圓	十九	袴着 日圓	三十
元服 日圓	十九	烏帽子之 日圓	九一

尚流小笠原初秋

日縁

坪内雄
氏寄贈

明治三十八年十月廿二日

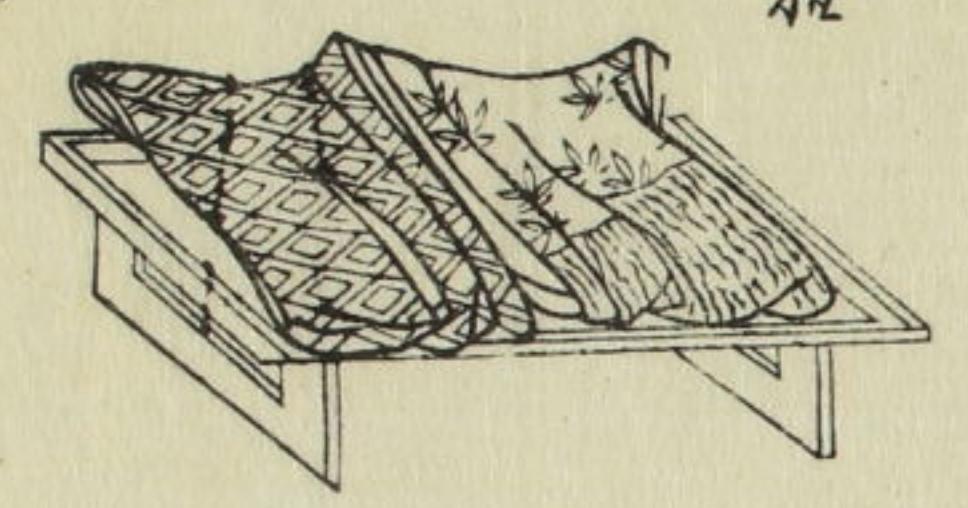
此其其を細て考ふる時、いふ今異なる、いふ此家の見識
又依る少し、異なりあり、何とも其に生れ教へを司
るるに、國なるものは、就中小笠原歴代教百卷を、國
は、日縁の矩規、又通じるを、按革して、尚流は、日
を法にして、不用者の、對、婿礼諸祝儀の式、及び
教百ヶ條の目と、之、初學の教へ、殊更、附、日縁で、使用の
一助、ま、終る、事、對、一、變、應、會、新、元、礼、さ、う、ん、而、已

[illegible][illegible]

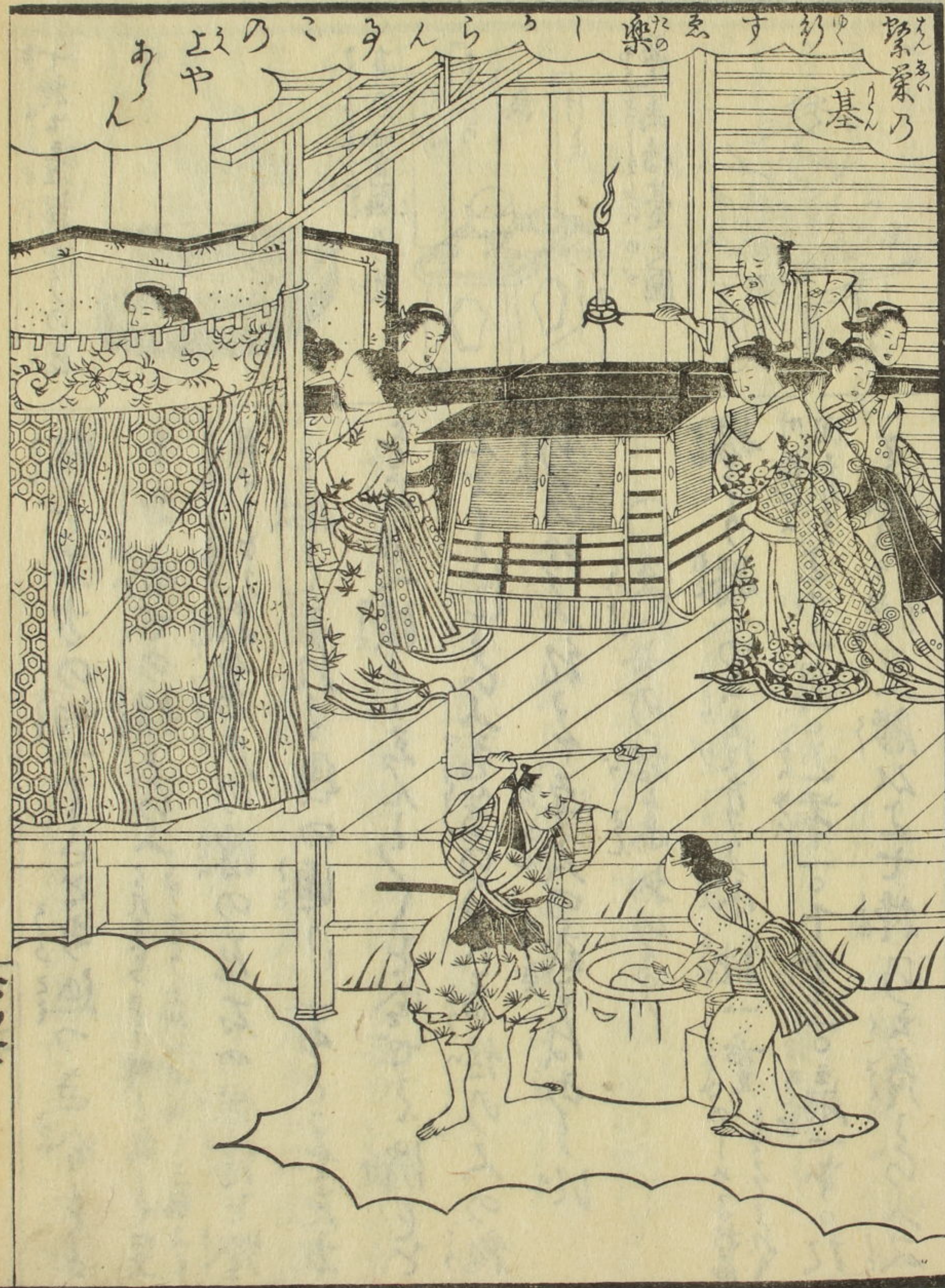
○嫁後の仲人など大切の勤なり媒のつづきは双方に定規るべし
 或い解或いお痛其外一失あるをも色も凡語るぞー仲人の
 付よりいば偽かざるをえり凡実をえ結ぶるに子孫
 永久乃橋渡しと来く双方のよめい大方なり凡是妻の仲人
 とふざー嫁にゆるる男も幼稚より両親の心を盡しとかりい
 中うそ勢むべー熱縁ならざる時其心盡し一時又消ゆる
 勿狩るー此事を忘る凡男姑又孝をつー夫を大切す
 へき肝要なり夫と農工商の輩いあまう又什合又考はし
 彌心と者き賢素を守り世より若後又長ド冥加又盡て受けた
 る福と贈附又久し人より夫婦は又不合といひ我度いふに堪忍を
 せば孝婦とあり家内和合ー榮久又相續せんや宜月出なりんや

結納の事

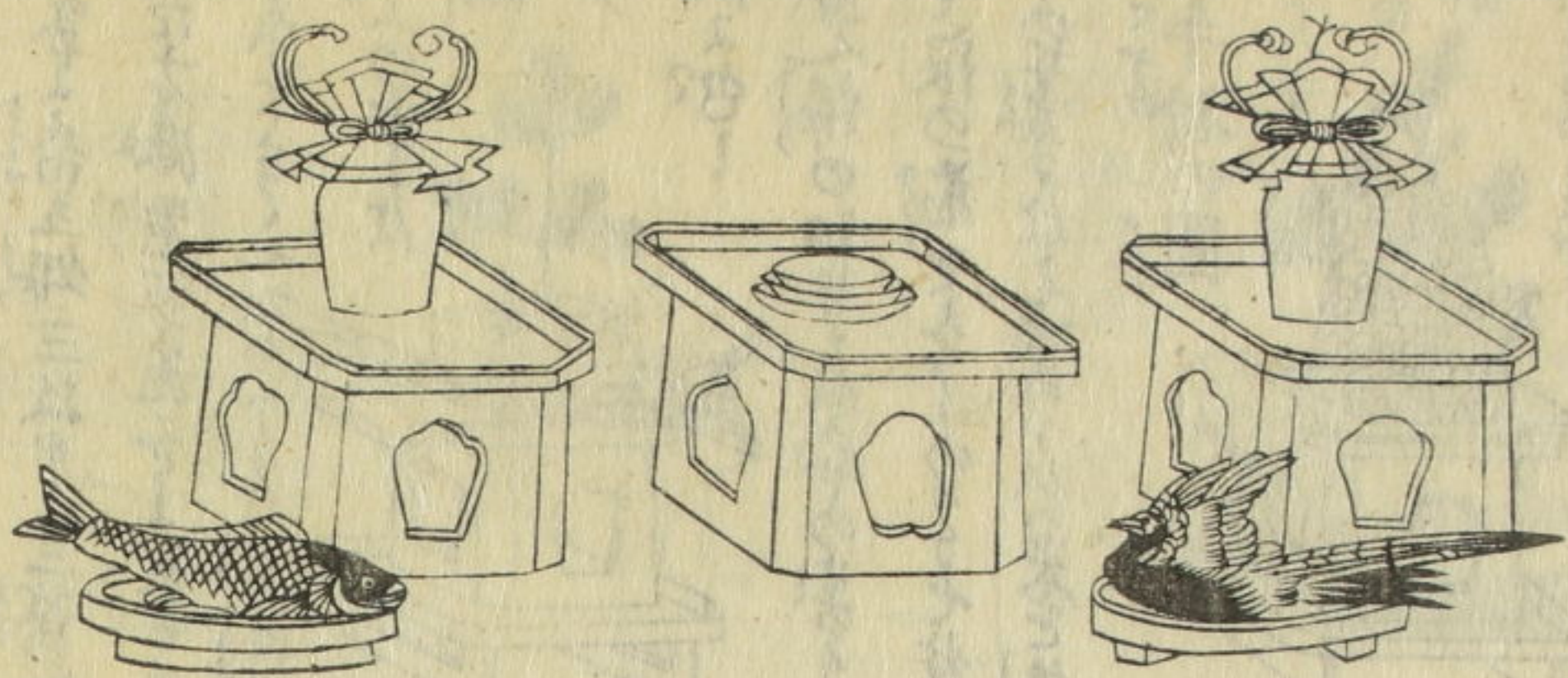
○結納の小袖は中うり者の
 下くつて被服久しぬなり
 又婚れの被婚のちより嫁
 又き小袖一重と逆小袖
 一重とありこれを合せ
 中うりつけいふに
 七重開るなり
 婚れの小袖
 つむきは
 襟とあり
 あいせ
 袖を
 糸で
 団べー



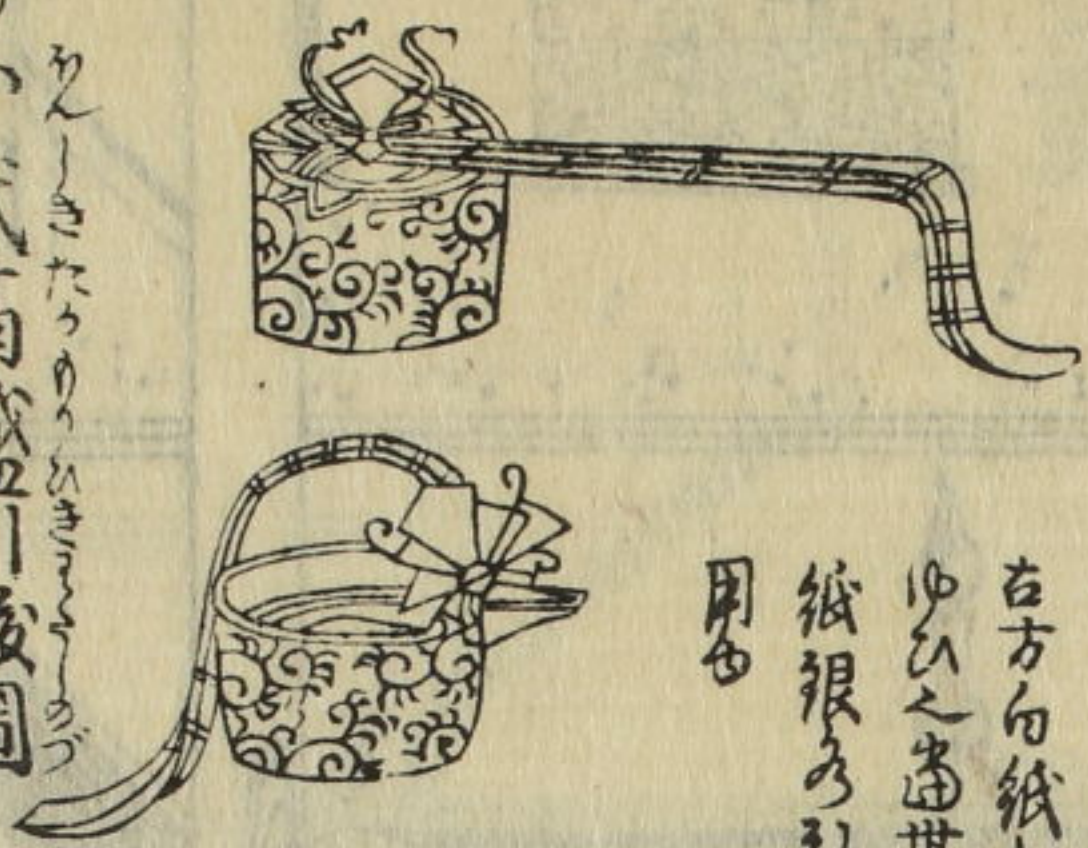
媒人従来して約諾をのひて婿のかたより
 結納の祝儀をきりへー後またのけれとほ
 ては再び度よりきき夫婦の誓約也
 上輩練の小袖を。板のおき。縫なくき
 唐織。敷箔。幸菱白綾。以上三重
 着七種七折たる下中練小袖。板のお
 縫箔。幸菱。以上二重と又着又種なる
 一トハ白小袖。色の小袖一重と三折三種
 するべー胃へも右刀目練着姑へも小袖
 着着等をゆるるぞー夫よりとるも男の



○三ツ盃瓶さんすぱいびんに五々五々ごごごご

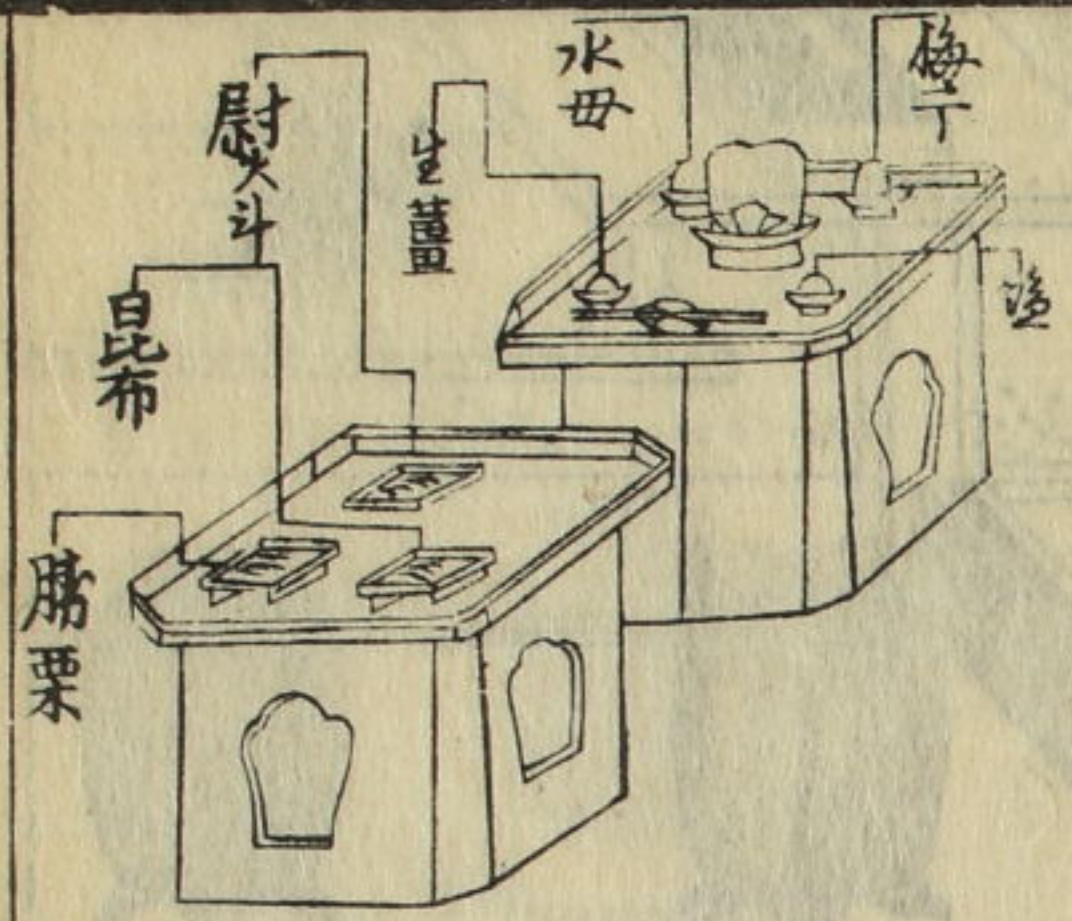


○辨又攪之圖



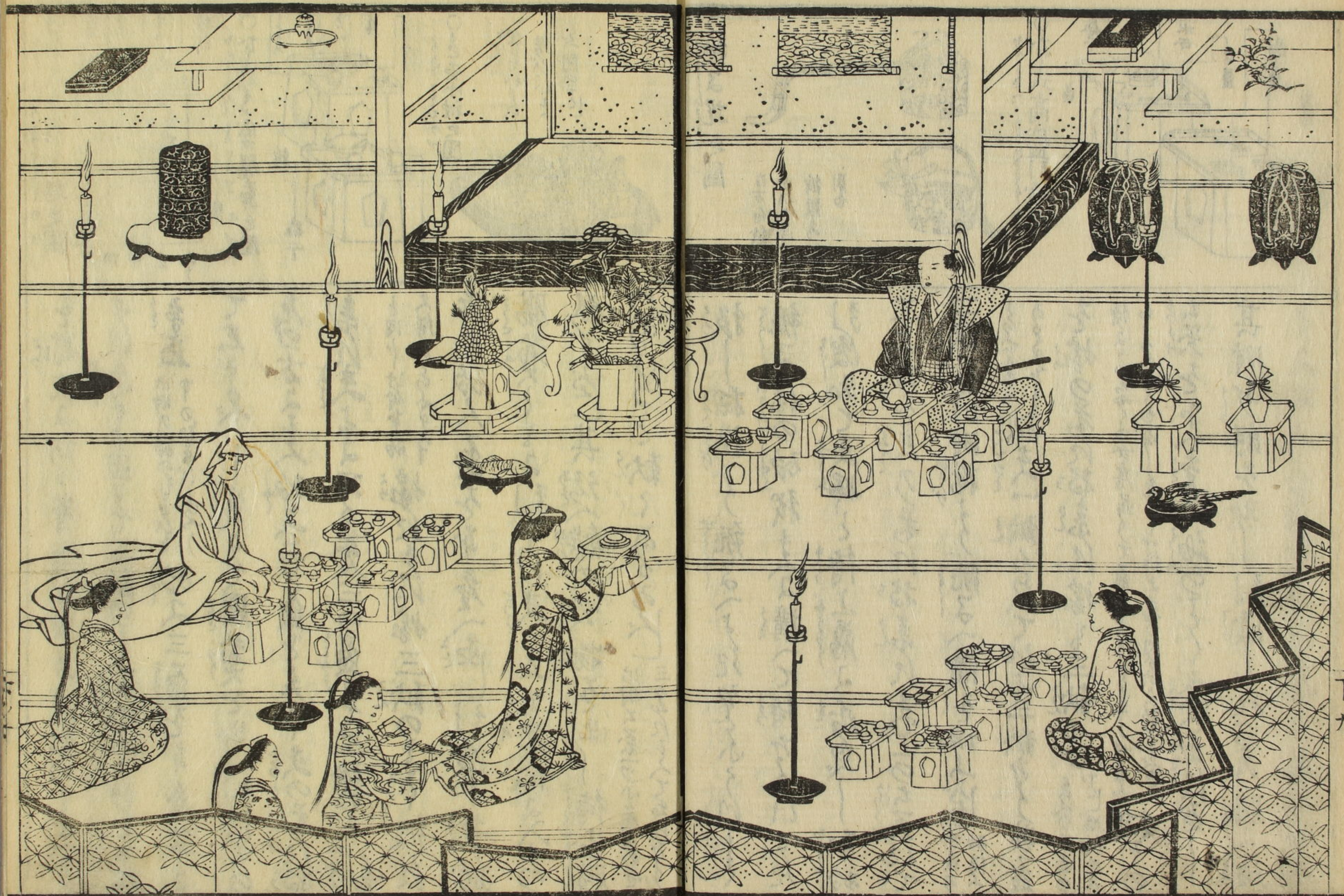
右方向紙々々
少少之通世六張
紙張より引を
用也

○本式高感引後圖

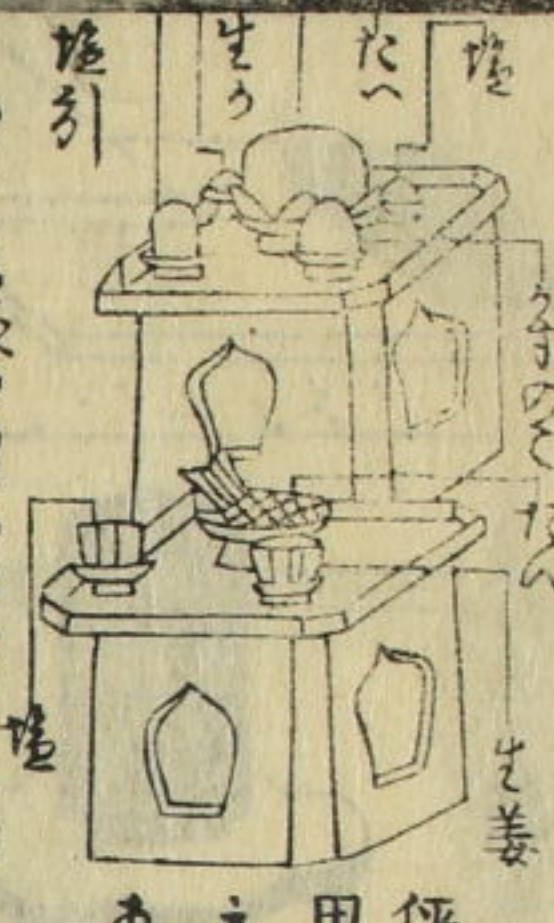


蓬萊の春酒を盃に酌み三盃を
を飾るに叔母女房出むるに嫁と化
粧のするに衣紋など袴の袴姿を
して夫婦禮をとりてまづお掛けを
結と福めであはれ挨拶して夫婦
昆布雲栗をきてまづお掛けを
き女房二人あし飾るに瓶を二ツ
下座へさし又酌み二人酌み
も下座へさし叔母の女房と
仰向し酒を提へるに又男房を
女房のするに提へて重祿同く提へ酒と

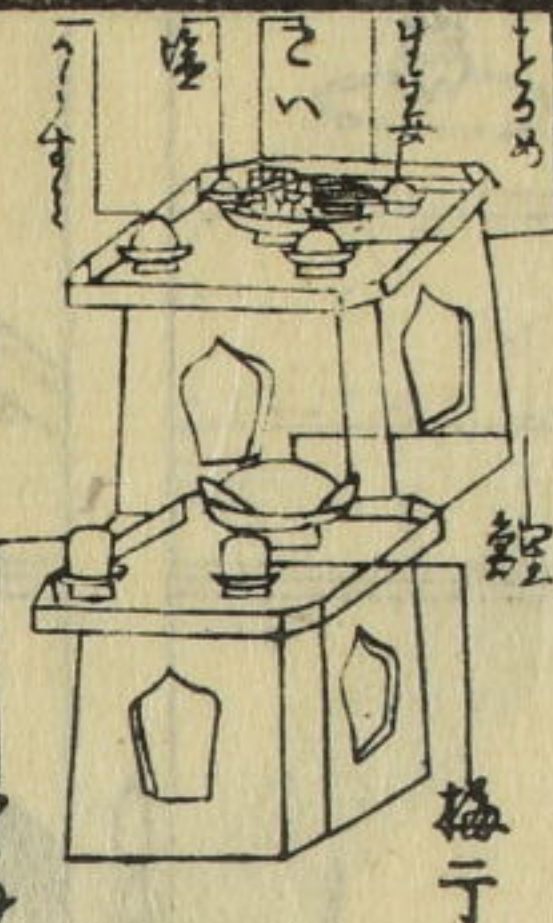
後一榎提より桃よりへりて又ふりて
 桃より提の碁我より構へて待たりけり
 引渡出て主婦と待上福は居るべし
 三ッ面をまの前に持ちまゝ上の土器にて
 二款をけし提より桃より酒を加ふ
 榎より提より一款よりへりて三款より其面
 を嫁の手に持ち嫁も三款の
 俵より又女房居りて面をとりて
 又土器より構へて待上福の内へ
 土器を下へて
 其時折紙を出し引渡しれ右の脇に居
 る又碁人三面をとりて嫁の手に持ち



○本式盛盛湯煮之図



○本式盛盛湯煮之図

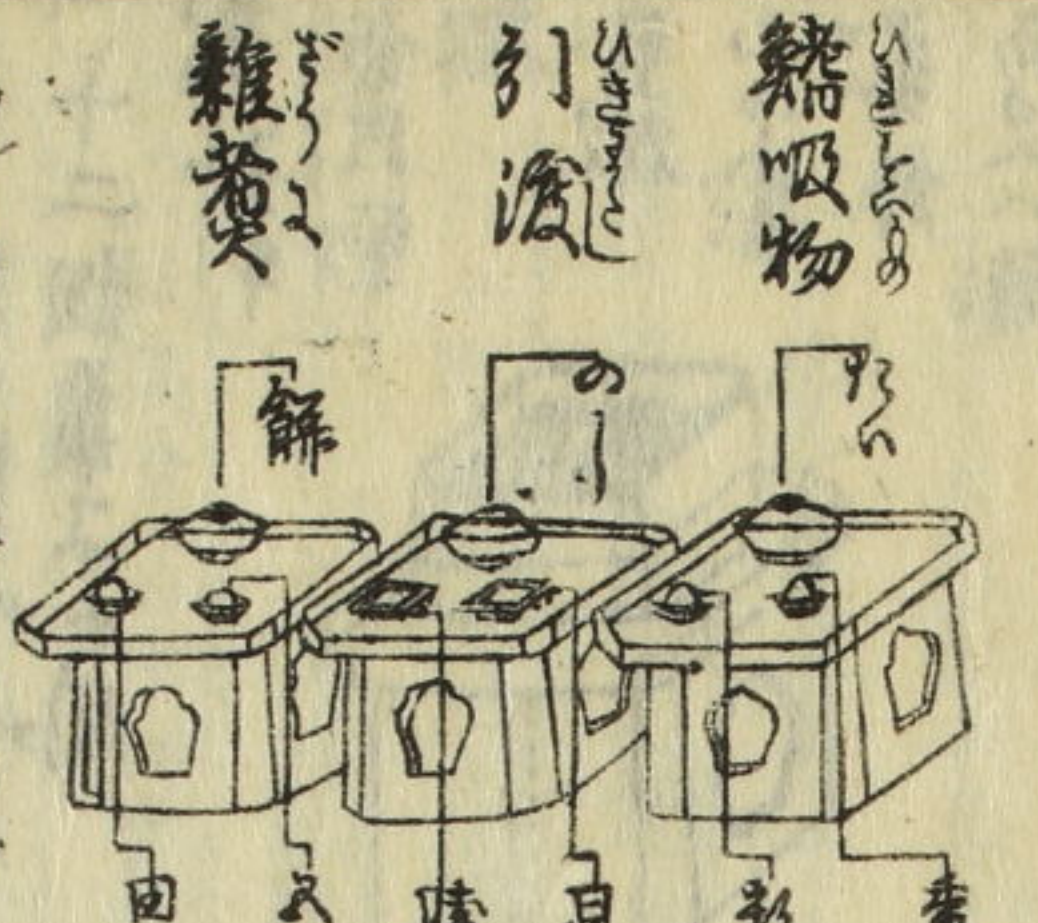


○本式小神之図

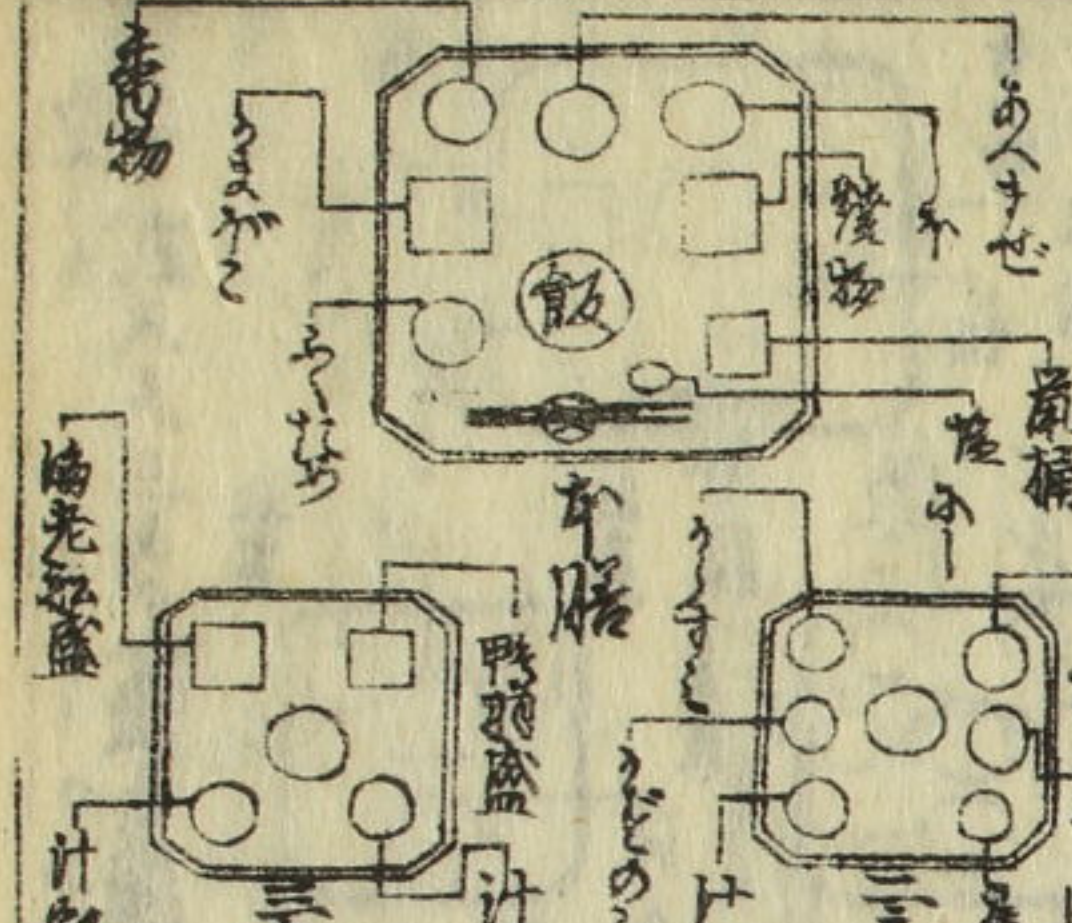


本式小神之図
本式小神之図
本式小神之図

○本式盛盛湯煮之図



○本式盛盛湯煮之図



と嫁よはる第二の盛盛湯煮三献のこまう

さくまを盛盛湯煮三献のこまうけとる

重ね け付のめしむきと お又三盛盛湯煮を中層へ押さ

てまきぐー 煮て盛盛湯煮と出 引渡しの

たの方より入め又三盛盛湯煮とまきまの煮た

煮たまきより第二の盛盛湯煮三献のこまう納

と同一層へ押さ 嫁にさくま三献のこまう納

なりめん盛盛湯煮を中層へ出 引渡しの

盛盛湯煮ともより下げまき立て居間へ入る

引渡しの 其後盛盛湯煮の吸物を出 待上膳

つらふと軟くあるまじ け付のめしむきと 三盛盛湯煮を中層へ押さ

船より盛盛湯煮より出 け一献のこまうと出 小神の

方より押さ 盛盛湯煮の煮たまきより小神へ出 煮た

二層盛盛湯煮より出 嫁にさくま三献のこまう納

は製する 夫婦盛盛湯煮より出 難煮の吸物を出

令銀の盛盛湯煮と砂の煮たまきより居間へ出

挽り令銀の盛盛湯煮と軟くの式あり 待上膳

て押の肴を出 夫婦盛盛湯煮より出 式法の湯

煮を出 難煮の吸物酒と出 塗盛盛湯煮より出

と煮盛盛湯煮の煮たまきあり 十二献の煮たまき

と煮盛盛湯煮と七又三又八又三又の煮たまき

女郎へ盛盛湯煮肴と出 煮たまきの煮たまき

煮たまきの煮たまき 式法より出 煮たまき

煮たまきの煮たまき 式法より出 煮たまき

婿これより基ききりたり
つしと信託の趣はなり
みあるべし

二軍はつとみりたり
信の事なり其族は上
藩を外の者なり信託部と調人
婿の膳部なりとて膳部

て後婚とて信託の趣とい
ふは信託の趣とい
信の事なり其族は上
藩を外の者なり信託部と調人
婿の膳部なりとて膳部

信の事なり其族は上
藩を外の者なり信託部と調人
婿の膳部なりとて膳部
信の事なり其族は上
藩を外の者なり信託部と調人
婿の膳部なりとて膳部

信の事なり其族は上
藩を外の者なり信託部と調人
婿の膳部なりとて膳部
信の事なり其族は上
藩を外の者なり信託部と調人
婿の膳部なりとて膳部

○婿へ入る八十餅の手
はかみ石八斗の餅と二枚
よりてあまの餅とて八十八
十八は



餅の形くわ
小餅は
ては八
十の餅
あり
餅の形くわ
小餅は
ては八
十の餅
あり

ろくど 婿とては床よりど 婿より
かど 婿は床を付るなりは 婿は
婿よりいれど 婿は 婿よりいれど
小神とて婿 万々限は 婿は 婿は

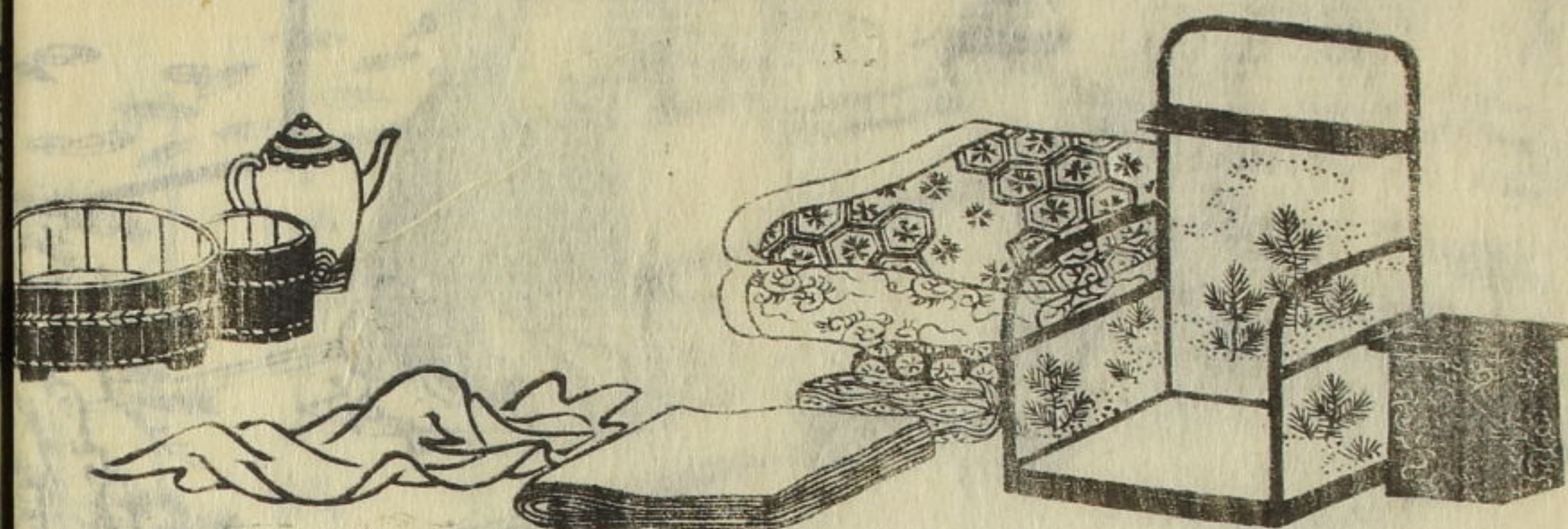
婿よりいれど 婿は 婿よりいれど

右の信託とて結女郎いさひと 婿の
婿よりいれど 婿は 婿よりいれど
婿よりいれど 婿は 婿よりいれど
婿よりいれど 婿は 婿よりいれど
婿よりいれど 婿は 婿よりいれど

婿へ入る八十餅の手
はかみ石八斗の餅と二枚
よりてあまの餅とて八十八
十八は
婿へ入る八十餅の手
はかみ石八斗の餅と二枚
よりてあまの餅とて八十八
十八は

○ 產道具

産室の之図



をかけ一對女中のうち一人を入り抱え○ある
桶一對○あがり産屋のふく○腰かけに
をいづる者の腰かけ又児は湯をいづる時を
腰かけは用也○枕大小数多産婦まゝの上
さげは用也○湯桶○たらい○ひしや付し
新しく大小あづる○むき二十に供し十二
縮十二布さるべし○お知りし潔き○あ
うけは後の児湯をいづるふ足れよまゝの
せうびれれを足ふよまゝれてひしは風呂
しきのごく布をよまゝ○湯あげ児の水
をぬぐふなり毛もふくしきぬく細き布を潔

ぬいをせし

○きま

児生とて七十八日或は百廿日や小きの物を着
せしは産あひん児のふく縮の敷物さるる
甚あし湯をそこへいゝ児の病生とさる
ぬいしやのふくぬいしやぬいしや今世はさる
より産産の物をあら切着で到一匹巾さるも
着せぬるは其ふくぬいしやぬいしや却て損ひ傷
るるせしはこれとて富貴の人世俗さるる
中がことさるの病と患へ難めとさるる身へ

○喰

食神



男女とももてて百二十日めと目と急つて食神
 あり「男とは男中より」女子をば女中より
 するへいと思ひ出さぬ食神の親うけえたる膝
 委腰尻居る事人まゝ飯の糸飯をえて
 りの膳のしほに押と板を三箸くめてけを
 喃る神あり「〇餅又膳の花の膳より
 是とも三箸きりて〇右の膳をきりて後見の
 人な後」三箸と出さぬ食神の親
 三膳のしほり思ふは二膳より（親か）出さぬ
 あり又思ふ一膳のしほり思ふ三膳のしほり
 三膳親三膳のしほり膳より又親一膳のしほり思ふは



児三歎こさんのとして親おや(返へに親一歎おやいっさんのむをへ)児こより
物ものありて親おや又一歎またいっさんのとして納なるし児この方はうはじろ
見みしみ中なか式しきくねじねじ又また引ひ後ご雜ざ糞ふん吸物あつものにて
えが
もか限かぎよりぞ○女よめ又また女の親おやをえどお慈おほれの
引出物ひきだすものはみどみど孟母もうぼにはー

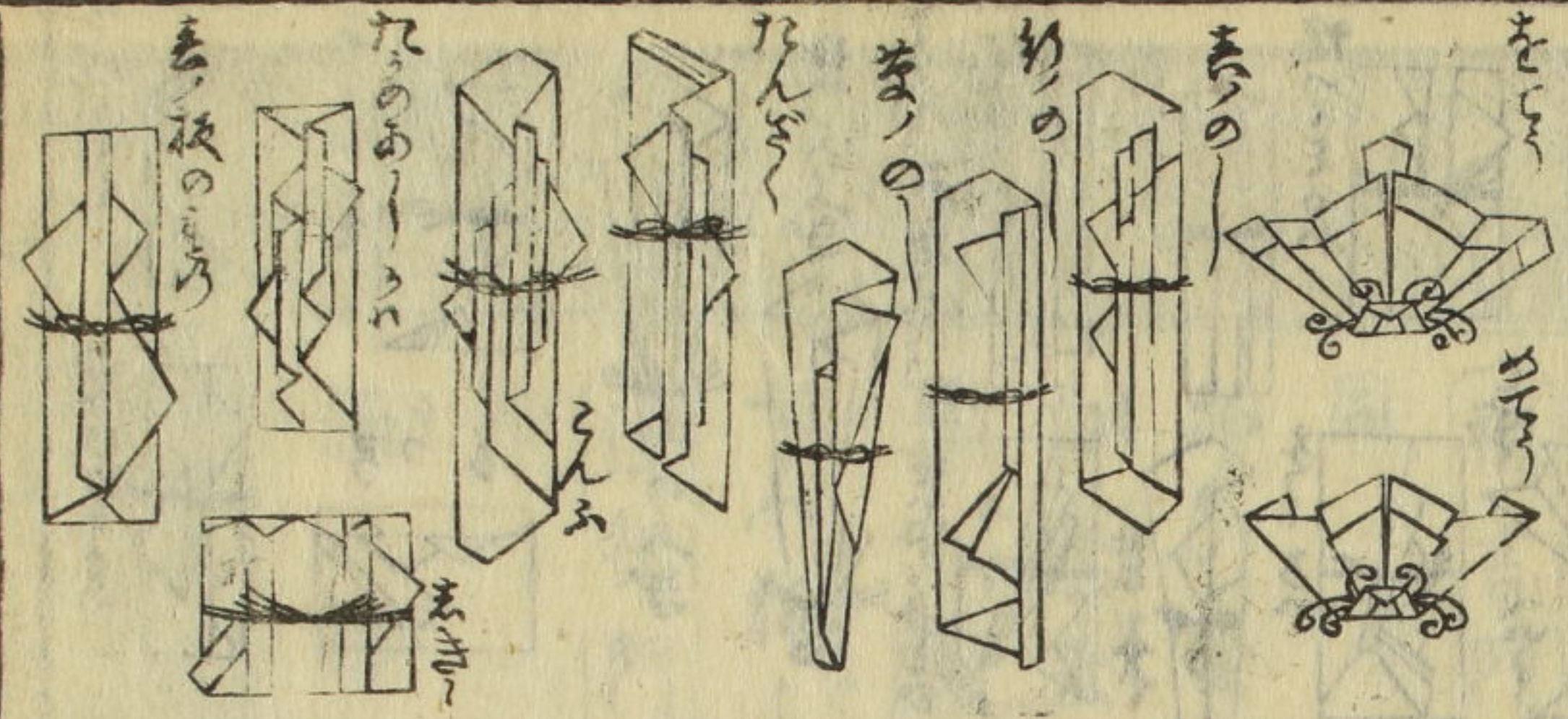
○ 媛 正

男おとこは三さん歳の十じゅう月げつに生うまれし。其その親おやの方かたが廣ひろ蓋くさ又また振ふてさへん結むすみ引ひきさこのひき
一いち把は茶ち七しち筋しんひと七しち種しゅとて出でれ給たまふ。○児こと名なあへ
向むかひせ髪かみ髪かみの親おやに考かう男おとこ又また九くの髪かみと三さん袂ていおの
髪かみと三さんとて袂てい袂てい一いち把はのく類るいよりけしる。





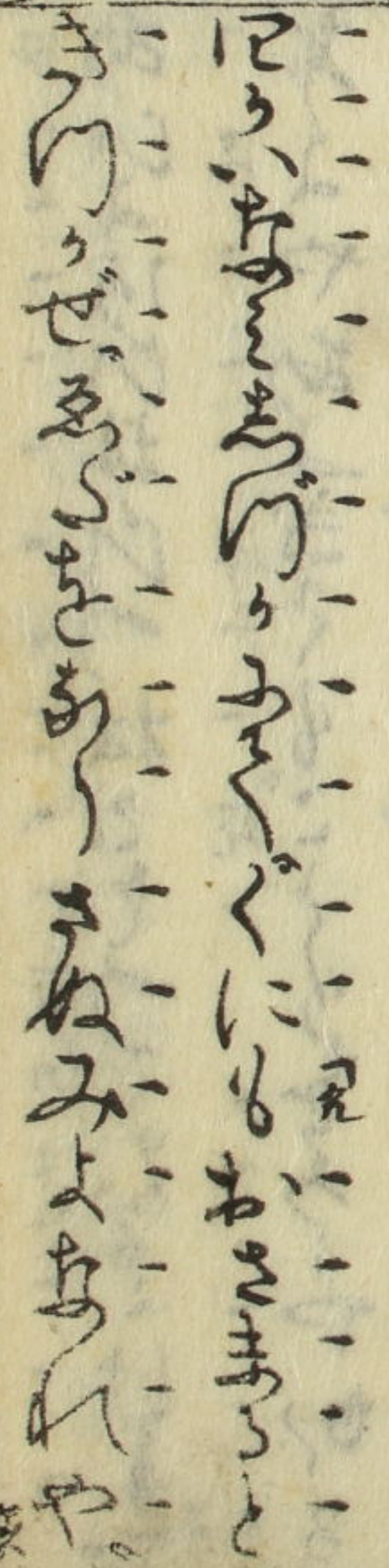
小笠原折敷



を看とる人のゆゑに今度一統月代を利のれ
 には用ひしとてなれたる月代利のれとて元腹の
 れと利のとていれぬきとて有儀の人よりい
 ちよ今月代を利を以て元腹とせば「親元
 腹の人よりい法のとて」髪を結とて又い髪
 と法のとて結とて髪と被柳の髪とてこの
 小刀をてやしてすうとて又い髪と結とて今と
 惟法のとて「てあが」又次の間へ月代と利と
 知るとすうとて月代と利のれとてあがれ
 ぬとて元腹の式とて髪とてすうとて○とて
 したる髪とてのちぬきとて髪とて親元の袖へ

卷下

[illegible]



のこぎ

三升之先也

やまこぢれもぐあふしよをあふん

てうすむぐなぐ

よろづよろづあをいしんぞめでたき

先めどもうけいさやうこころむなり

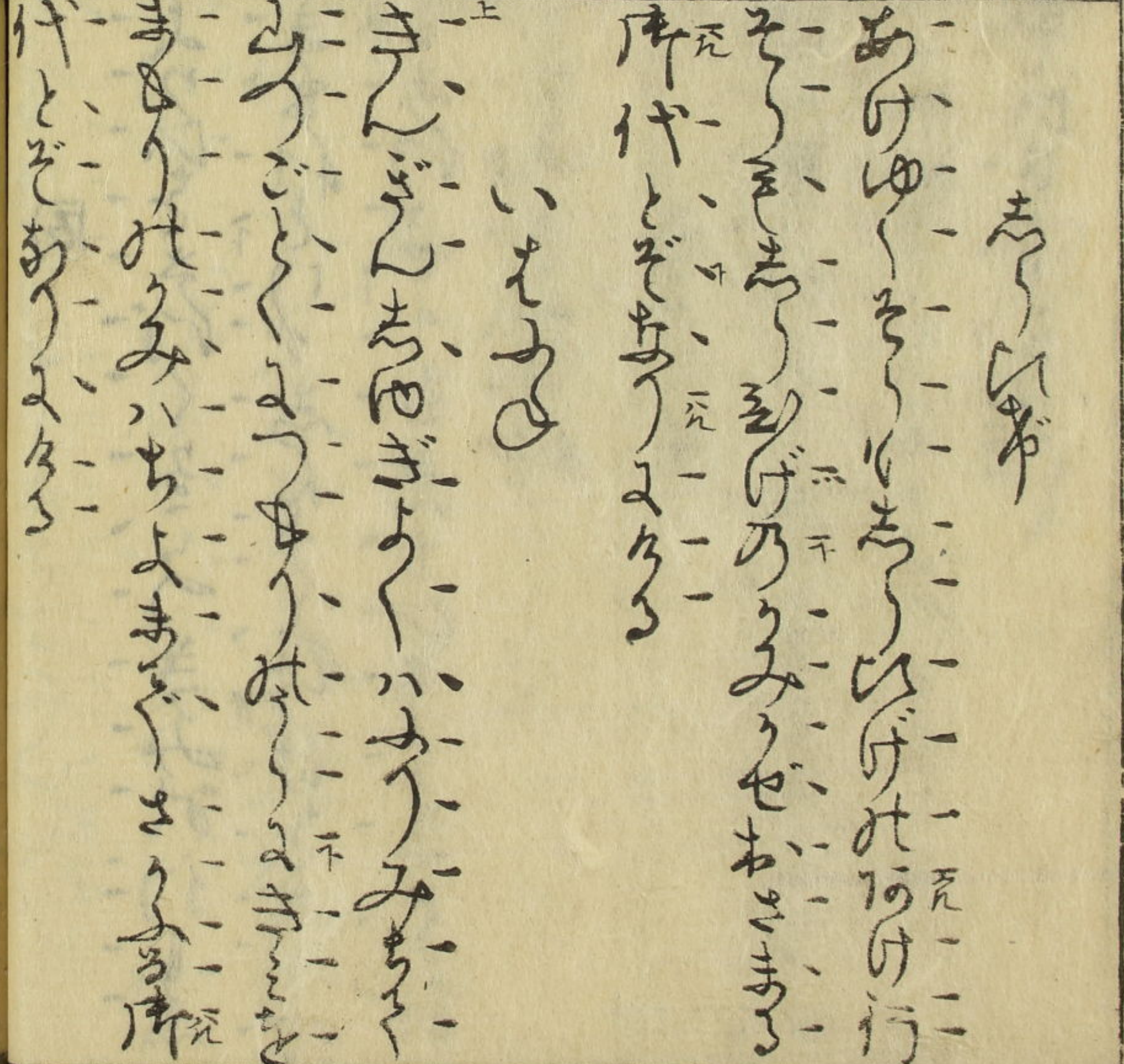
五十七

三ノ下

三下はつぎをもちてみく

て纏くもす 物のこゝろ

七
一
一
一
一
三



上

ちよろなめしをまのびぬいり

みづはくきりてをのべさる

ろこそあひゆくまゝ久し名く

洛陽にあり乃山たうもく牧所代を

社とげんとたまに
松竹

松竹

ありきしるをあれぬけりぞわづらひ
あらた
ふじぶ海辺にちみちげうあそ
ふーいそめれあきついろもこそあ
田のやまうせり志げうあり
くれそ

同
佳祝門
ふれも何やまうくくふ事にあ
やまうくくは真のそなる所代
こそめづたふれ

にきす

玉合図



あはし焼のそけい三入に方
もん中ふふ茶入茶碗の
あはし焼茶碗にせよと
とくちやう

○一玉は玉合の図

あはし焼のそけい三入に方
もん中ふふ茶入茶碗の
あはし焼茶碗にせよと
とくちやう



風爐玉換の図



風爐小板のふろとてきとみす
むろ右の玉き地後みすの
目七ツ目九ツ目十一目とよみ
かつあはし焼と右の
あはし焼と右の
の通り茶入茶碗にせよと
をせよとてきとみす

みづけまぐちりにまぐち非が海
とくちやうとてきとみす
さぬちきふく

ほうろく

あはし焼のそけい三入に方
もん中ふふ茶入茶碗の
あはし焼茶碗にせよと
とくちやう

きみぐちやちやちやちやちや
とてきとみす
さぬちきふく

A collection of line drawings of various kitchen items. In the top left, there is a bowl with a handle, a brush, and a small jar. In the top center, there is a cup with a lid and a handle. In the top right, there is a large pot with a lid and two handles. In the bottom left, there is a small jar. In the bottom center, there is a cup. In the bottom right, there is a spoon.

にせむ
てて
乃圖



葉入る葉釜の煙の丸のうゝ
 丸のうゝとあるは「丸のうゝ」
 のうゝは通う心申をさす
 うゝとあるは蓋の具を
 うゝとあるは釜の蓋を
 うゝとあるは釜の蓋を
 うゝとあるは釜の蓋を

いふとちうもけむすまゝいと
よめもどたれにぬぐひのあか乃
おさあはるまゝの所

猿通寺

市志んりをぢや市志めりり
 ぐいまのちようけり市よ
 びづみきをぢやもめん

五

いけい 邪代乃どくろふもふほ
あふき人ご海いやまめどかんあ
られあうぞあうぐふき

西王母

みり、うあゝんく

同

いふきをへたまふあるきを君ふれ
れくもいふきより心ふく

卷之十一

○茶たてやとた種づらの
丸の通りとまが丸の中と
とまが丸の中と



○風炉たてやうの圖



蓋をひきとて茶を
碗をえと茶入の端を
あててとて茶を
のてし茶の外めき
こへ茶の時よあ一茶
やかり

○茶の湯法度あつた

ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一
ふたの押さへ方一

高さ

高さ
高さ
高さ
高さ
高さ
高さ
高さ
高さ
高さ
高さ

不荒松

不荒松
不荒松
不荒松
不荒松
不荒松
不荒松
不荒松
不荒松
不荒松
不荒松

雲林院

雲林院
雲林院
雲林院
雲林院
雲林院
雲林院
雲林院
雲林院
雲林院
雲林院

養生門

養生門
養生門
養生門
養生門
養生門
養生門
養生門
養生門
養生門
養生門

同

一ふろふ板といくえ膳ふは
それ持たう

一天井のこたえの蓋といく
のふらへる一蓋をふらふ

一の附いふをあらう
に蓋をの附いふをあらう

一の中へあらう
一中つきの附い蓋いけりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

竹生庵

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

同

一茶入の附い茶入の蓋い
けりぬ

花よ三ちゆしれあへり人よはとよま
あけそめくつちうあしんもちをよい
そよあふ志だりあれハカシム
乃まさしくあゝ

上
言
つる龍
よ海によう花をやむけつみどり
をもんせ、乃ちあそきまの所けり
くだりふも、おたまたちうてあし
いさにながらゝくちあをかりやく
山路うなぐ

上
言
ハーマ
ほうせいともいなるらんすみ
こけゆくやあまをさぬちう
と見えろくるわぐれくもまだ
いのどろなるもろくろを
そふし

上
言
羽と流り
のせむよりれあそきまの所けり

[illegible]

みづしめこゑもしきあつげや
 だすれりろこもあやうきつね
 ゆくゆくはあはれなるや
 らでまはれをうむあはれ
 げらふゆつはあはれ水けく
 まくまはれもげうきし
 うねいき
 秋のなごりあつたはのなごり
 せけうけはるまのうみあはれ
 ふみよりあはれなるもあはれ
 所代をあらうきふ
 葛蒲
 きみ代よはこもむきふ
 くまうれあやめあはれ
 ひまももあはれ
 やく
 水室
 のうねやいむあはれ

千利休居士真像

茶人

三賦

識

草

野

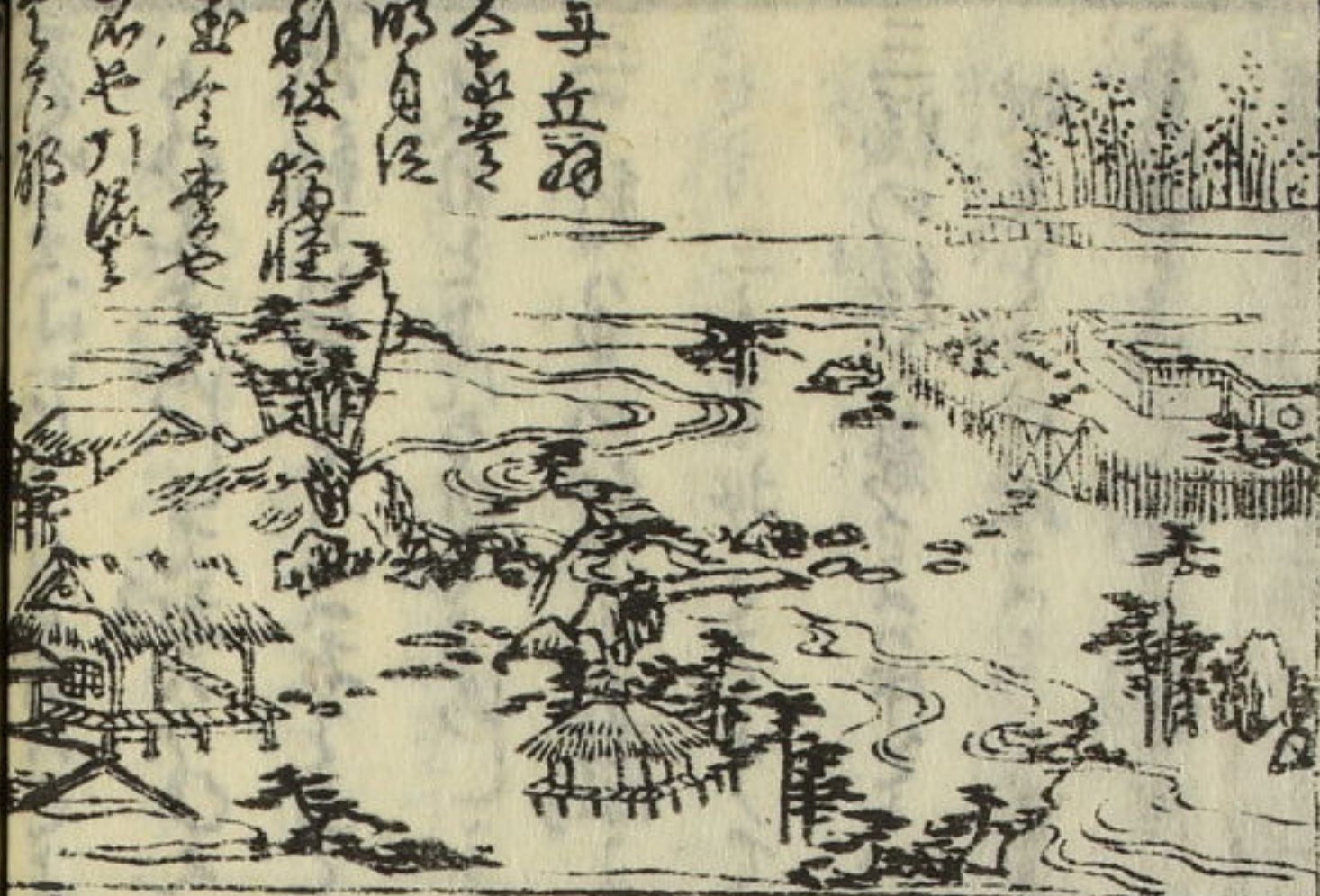
興

去

報



野々開來北山下似
興東風期雨後探芳
去雲間幽路危唯應
報春鳥得共斯人和



手立

全書

明

利

西

所

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

銘

乃けーきいありあうーうなうげハ
こでれまふふゆわを何のめあふ
ものおきあれうーくまむはれ
ぎまふあうー

さうし直

ちふーちふあうーあふむうれ人をた
づふあふあふくくくくくくくくく
のぬくくくくくくくくくくくくく
ときつあふあふあふあふあふあふ

源太夫

とれハきくくくくくくくくくくく
やち浦つふくくくくくくくくく
あふあふあふあふあふあふあふ
とじくあふあふあふあふあふあふ

養老

長生うーあふくくくくくくくくく
ふれ年うーあふくくくくくくくくく

菜道百首終

天正八年孟春

全齋專刻

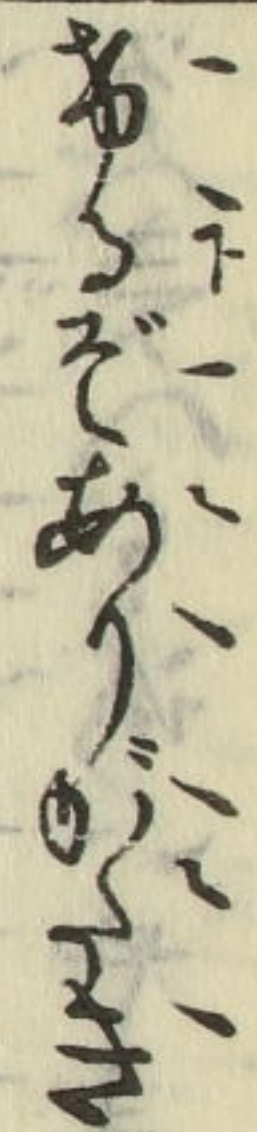
辰



蟻通

め
う

神代巻くみすあか
 るきへど海やまねんあられ



國家を護る所ちうひをいふできをあらわ
めたまふとまこととあやむたうなり

神まつるはあたまの
くもぬきみが代をあらうくやう
とさよまのよこまつをとるそてちとせ
けまを万代と校りぬきぬみよりふく

ふり先もさめつゝては、
おきえらる
あ乃世にゆきの下ある若菜と今
くうあつそほまゝなるかたより
むろいふやみずけ山りかにてあり
雪のきえりあしを道とわれ

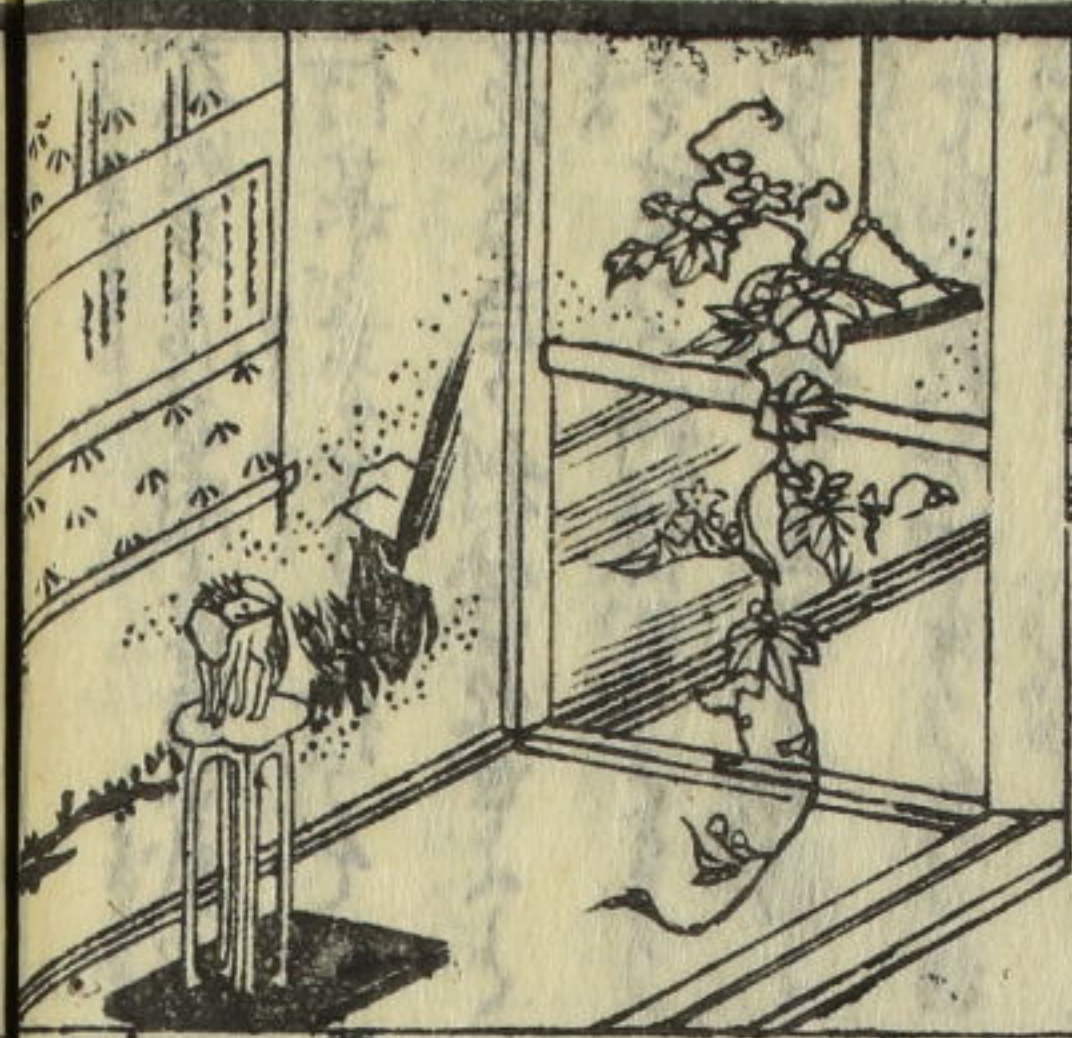
[illegible]

生れながら下りまては」と
つゝ我々もつゞき其法を
まじふはうに近代大の
つゞき諸家一家の流義
とまゝくあつた。然るに
世におもひをめぐらさるる
をあらわし「日本万花を如
きは服ひ自他よそむいど
多きをまゐるところにてけだの
数なり」東山義政云々
より、おら華中親義より
これを用ひ来たり神心（かみこころ）
より扱ふふは義宗より長き
こと又抑へば「書を明けて
花よりや」わがごとくあり

の通とやノ
 西行操
 あつたまりゆく日おびへく頃もやうい
 ぬきあれやよとまりてをぬき
 ありあけぬきもぬきとまりふれり花
 ありあけろちなり
 うねめ
 えふあゆみのびようもほちなり

花雪のうはまきこころそへくむきさたろ
 花をされさるさるものもあゝおれをを
 るけけきうあゝ
 楊貴妃
 梨花一枝あめをゆいさよそか
 乃くさへきさるさるものもあゝおれをを
 来央乃柳れみさるりもあゝおれをを
 まさる人きさるや六宮の粉黛の顔
 色はおれのことさるや

我
又
血
を
丸
の
と



○嘗て花と不意とてふは
花雲へあを天底よりとて
花雲と花と此の本小刀使
巾をそへ雲の元より
き方と云ふ一あはと水
を入傍より花の枝枝振
ふとあともそまゝ此の本
長きさうして流るゝ雲は
花を入幾りあも程よく
花巾とて薄板をあきて
あをそ花雲とあはと花
次の君へ下げ亭主とて
亭主花を見て愛し
感心う授けあふ
○床あは花雲を云ふ

七

中月やぐりげろろくちや
 もよむちやぐりげろろくちや
 山よむちやぐりげろろくちや
 まぐりろろろろろろろろろろ
 まぐりろろろろろろろろろろ

150

重宝とみえそハ重宝と見えさぐ九重
花ざよりあふすもろりきうめく

樓門

つゝむ山ふりりもれ花さうく
雪乃ちやうけふ志がたみより
そいふゆゑふや松れ義色りまめ
きく胃そうふをあつ波橋にり
是よりく

五

年に月げつ越こえに兒こ新あらた増ふの梅うめ乃すなはをを文ふみ
くあをあらば久ひさくく天あまぎる

雪のちふ世よはえさるあふりや

ありて
 みまをば柳橋をこきまやぐさ
 きこゆこそやうれそまふら
 と思出づもきりあふきあふまぢ
 よ思ひたつこそあふうあれ
 ありて

10

乃みやこきくぢやうれつろーみ
くやと思ふるれろきう

[illegible]

つめむしろそくやんと心いれやま
とびふむありあけれよふとま

きたつーみるゑいぐいふりあふうふ
 くらふく人やあふき
 元服そが
 ありありそいまいやふらふげた
 きた乃まゝあそめぐい
 和
 ござう
 ありやあふき
 ありやあふき
 ありやあふき
 ありやあふき

朝あさ夕ゆふああるる五ご井いふふふふ三さん英えい教きやうややく

[illegible]

牡丹



いろは
さればさるるのころはほつとちりぬ
るをわがよたれをづねあつむうか
のわくやまけふこえふあさきゆめ
みゝあひれせず一二三四五六七八九
とんとはやせむすまぎいきにめさ
きよ

弓八幡

松たきざりてあはれふまほしく

其一二帆をゆくせんを
 上達うしやうたつのうへにきたる
 海うみの拭ぬぐふ處ところにて種しゆくく乃
 功者こうしやなりん

らぬ所代ハスうの月丸うのあとしこ
山げよりさやあさうげよきくきく一カ
歳とつるあさむとよあゆををふりうく

同

花形の變化を考へ都て
 へ―極意の抄りなへくは
 〇さうなうざうやう
 くさまぐの姿は入るを
 以てなまきとせんと
 〇「タタ」言の花は葉物の用ひ
 するがよ」木の花うそ白
 き物代用物之法はあま
 様うそ花一本は葉を

二九二
七日七夜、此所をいましては天もあふ
ちりしちあらぬんかしめうみやまおさま
る所代なちうくことをまもり強ふ
あり八まん三志よれあんてぞめでた
ひ多敷

同
 きみはみちるんみづかぬくもくも
 まなくあひくさうもくもくもくも
 りあたる所あんさくぞめきたき
 かんさくぞめきたるなり
 おーき
 あはれもちよそふあさけれもちよ
 そろもあひあひそろろろろろろ

けふや大なるやおちかた山もくさそ
いかによりおもひ立ちきこるく

同

みやゝあれやいづれもまゐり
あつてもありいとろに海や

羽に海も

まのほとけはれと忍びりなみはおと
あはれあまきよつりいとわがきおふ

好くあく

和
たへま
はつね志しよきもまけあうごやく
をゆい海れきりやふくえあ
と
てのろく法いれぞ一そろみど
れきへをたのまげはし急乃法あらぬ
とさるまぎよき中れ法いよりあ
ドたましくけあ中ようかまび又所
れよをまののとりあくまびてそ
どはつめはよまぐるなり

舍利

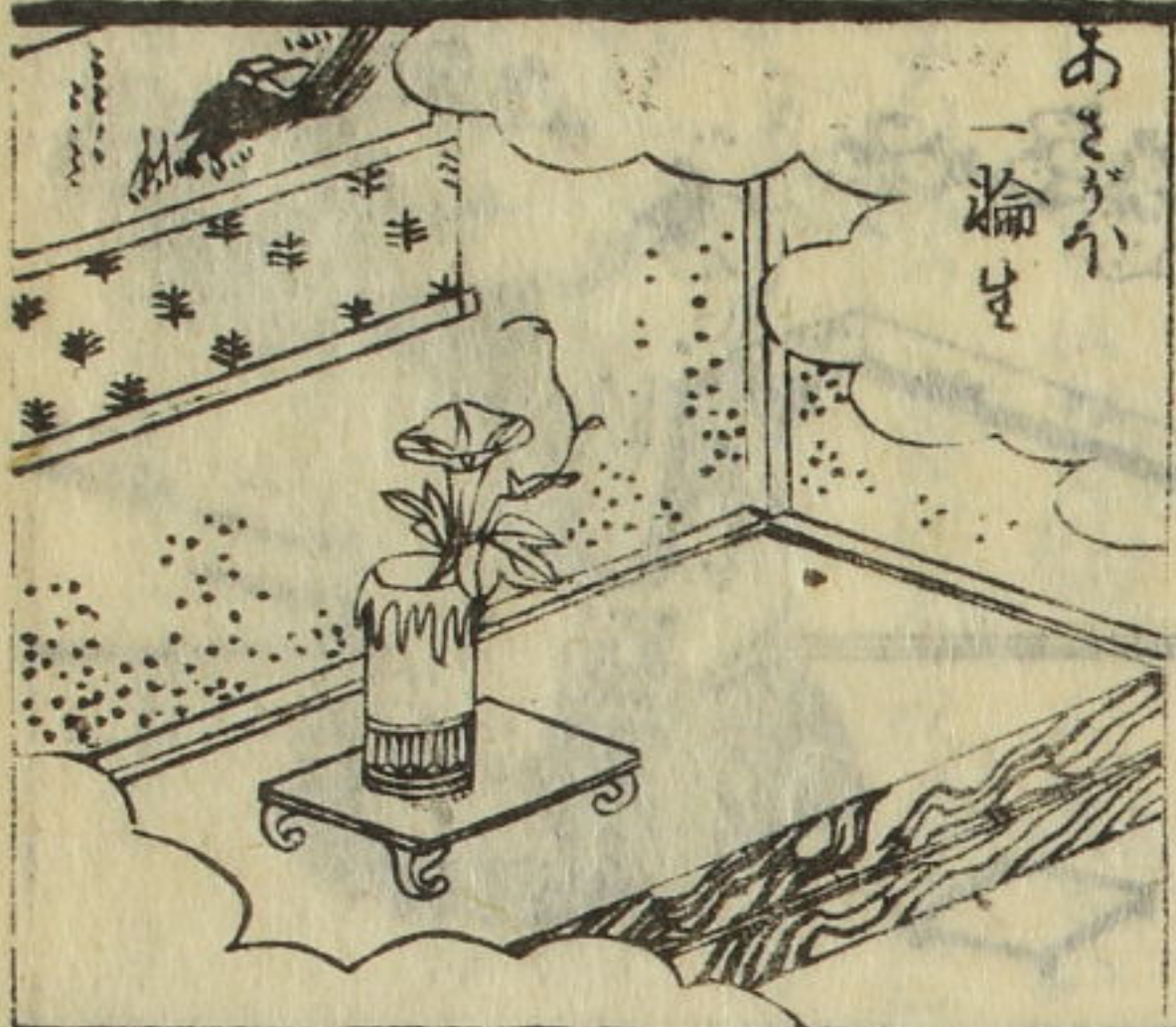
上和
死
それ
い
人
ぬ
ぞ
し
ハ
ま
ま
は
目
前
の
佛
舎
利
を
も
い
も
所
寺
ぞ
ふ
ゆ
う
う
き
る

柏カギキ尾ビ

和
近
光明通照十方世界
乃澄くげれむ夜念佛ヤセムよ夜念佛ハ
さやましく

誓願寺

和
元一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百



せらけりしあけし又園の床
 又只一輪のあそびを系とま
 へ生並座若のあそび
 の系又並朝咲べきと一輪
 ものこゝびつゝまゐりわごよ
 そ耐座とあは一花りなう
 たり右園中感念賞斜なり
 さらしとて



香とくちの香をいじりて
たきおとくは佃一社
よりの誰よりたれは
くしくは香燭又中
人虎中へれをいじりて
り受附の社とく一通り
て番との香をいじりて
一通りたきおとく

○我香をきく人の感
はて早下のまゝの如しそ
れにても用之る所ハ香しく
ふりうと名をはね、二度
二度同じく即ち一はじ
てやべきなり。○香をきて附
香燵の内の方と見るとあ
づから香通ひて後に見
らるゝ貴族の人派とお
それより香気ある不世
て見へー。○香をきくと
美人の座にも石ころさ
香きく程の芳分なり。バ
煙中へ入ると暖まるぞー
ろろと寝えんとしてほほ

上和
 又出、
 花まちえううね、
 今乃きあや

又正

遊
行
柳

志う一人念佛名さへわうへん今一志中うまへ
えー一生あやうさひけり久いへまふ向ひ
上品と生みうへんみぞうねき

大正

悪くあゝまゝ方里をあらがきす方世界の
諸天れらへぞきるや八日夜よきまゝあら

そとハ小町

いふことをしうといふのみう黄金めをズこま
やうな花を佛にたむけつきうれ道
よふよきうり乃道よふよ

七
 八

ハニニニニニニニニニニニニニニニニニ
ヒウともあるス乃ちくうんようち
フクミナニニニニニニニニニニニニニニニニ

○香の通るは庭中にて
 何くくつひはるや
 うに無別庭の園持
 一 猶もとて時おあやう
 てつひは付いそ終くと
 お別あつてつひはききう
 ○茶の湯の付も茶室の
 香と知れべくも付いそら
 した風煙いそりまふべ
 り茶室余派すそ茶室の
 湯と知れさたかへ香出
 くとえ懐あふくやう
 ○たき紙の香奥の付
 縁をよめ合せくたき
 ずあふた九連歌の付合

あふと相似いふ雲おとた
 じひつ 五明とたきふ
 くとく時れ終あふ
 くとくあふに香の香
 香の香と付もえ合
 たきけりあふよき香
 ぶくあふよき香細よ
 香教まぐ通る付いそ
 縁をよめ合せくたき
 ○尚もよりよか
 縁をえ合さすはたふ
 いておるく縁とく
 きけいをはるきき細
 は縁の真なりは縁とく
 え合るあふては合

そけがゆふありとて
 けけけけけけけけ

花月

くちみれ柳のみどりをち
 ぬ抄い本まぐみあ白く
 ささくこそせしおめち
 本より花さくと今乃世
 まぐりやなり

田む

げよやあくら世界より
 よびがててまぐりや
 あふりけりや

や

くるま馬とめく
 けりおれりまぐり
 路きよるがけけ
 けきせいを

葵と

善薩いよま来迎も志
 ぶ乃乃ありやとあ

順氏供養

上
ア、ヤ、ア、ハ、秋、ノ、イ、ウ、ユ、ベ、エ、ケ、
ア、オ、カ、ク、ホ、フ、ヘ、コ、サ、シ、ソ、
セ、ス、タ、チ、ツ、テ、ト、ナ、ニ、ネ、

以上

大率全壹冊

併せて紙形全二冊或ハ
全三冊のどぢりも有仕

此書は女子に當てて脱てこの格と立居るよりいふ事とて後一海飯答
至客酌通れりから棕の合居より果て庖丁菜香の作は結構の圖式
婚禮妝飾の式は用久妻書れ式も作すて女子に於てはと洩るに
其れ各々を著して要く偷にたゞいふあてふ得あると限か一旦彩色
紺の介立派におは立入入学婚れも介一切女子のこれあげに込め
格別至宝奇麗なる品として作らん名流求め法益可あらん

板元書林 大坂今無橋通加久寺良町
河内屋吉左衛門

右諸國のまのやうにも生ひて居る者少くても救ふべき

